

第44回 国際腰椎学会 (ISSLS) 参加報告

2017年5月
in アテネ

整形外科 副医長 住吉 範彦



学会会場にて

この度、2017年5月29日から6月2日までギリシャのアテネで開催されました第44回国際腰椎学会(ISSLS)に参加してきました。

ISSLSは世界各国の脊椎外科医・研究者が腰椎領域の最先端のトピックを議論する権威ある学会で、脊椎領域では世界最高峰の学会の一つです。ギリシャの過ごしやすい地中海性気候とは反対に、議論は白熱し会場は熱気を帯びてさえいました。私にとっては発表の機会を得ること自体が大変光栄なことであり、学会期間中に見聞きしたことすべてが今後の糧となる経験でありました。

今回私は、「A survey of the attitude

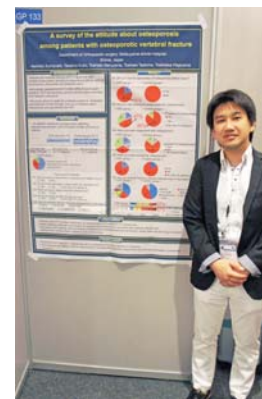
about osteoporosis among patients with osteoporotic vertebral fracture (骨粗鬆症性椎体骨折を生じた患者の骨粗鬆症に対する意識調査)」という演題名で発表させていただきました。

脊椎椎体圧迫骨折は脆弱性骨折の代表的な骨折形態であり、患者はADLを極端に制限され、予後にも影響が及ぶことが知られています。しかし、患者のみならず医療者側も予防や治療に対する認識はそれほど高くないのが現状です。この認識の低さこそが負の連鎖を形成していると感じ、現状を打破するための第一歩として、昨年から脆弱性骨折を生じた患者の骨粗鬆症に対する意識調査をアンケート形式で開始し、今回の発表に至りました。

今後はこの意識調査の結果も踏まえて、骨粗鬆症とその結果生じる脆弱性骨折の予防のための方法を検討していきたいと考えています。整形外科医のみで

解決できる問題ではなく、院内の医師以外の職種の方数名にもすでに協力をお願いしており、建設的な意見や提案をいただいております。今後も、この不幸な骨折を生じる患者が少しでも少なくなるよう努力してきたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

今回この貴重な学会参加を許可して下さった山本院長、不在の間ご迷惑をお



発表ポスターの前で

かけした整形外科の先生方に感謝いたします。まだ目標への第一歩の段階ではありますが、この調査にご協力いただいた、整形外科外来スタッフ、病棟スタッフに心から深謝申し上げます。ありがとうございました。

アメリカ泌尿器科学会2017に参加して

2017年5月
in ボストン

泌尿器科 飯尾 浩之

2017年5月12-16日にかけてアメリカ、マサチューセッツ州ボストンで行われたアメリカ泌尿器科学会(AUA)2017年総会に参加、発表してきました。

泌尿器科の学会としては世界最大規模の大きな学会で、世界各国から約1万人の参加者が集まります。

私は、今年の3月まで勤務していた愛媛県立中央病院で検討を行った、「Application of local 18F-fluoro-2-deoxyglucose uptake by the prostate to assess perioperative results of

robot-assisted laparoscopic radical prostatectomy (前立腺局所のFDG-PET陽性はロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術の周術期成績に関連するか?)」という演題について発表しました。

近年、前立腺がんは日本人男性の罹患率1位の悪性腫瘍となり、泌尿器科における重要な疾患の1つです。前立腺がんに対するロボット支援手術は2012年に保険適応となり、現在では日本でも多くの施設で導入されています。また、FDG-PET/CTは悪性腫瘍に対する核医学検査として様々な疾患で使用されていま

す。

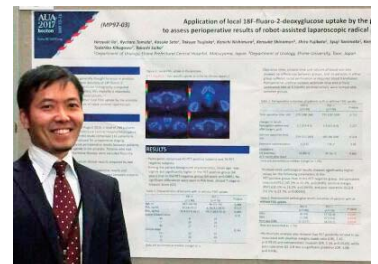
今回、私は前立腺がんがPETCTで光るかどうかが手術の成績に影響がどうかを検討を行いました。手術時間

や出血量など手術の難しさに差はありませんでしたが、病理学的悪性度はPETCTで光るほうが悪く、取り残しのリスクがあるという結果となりました。

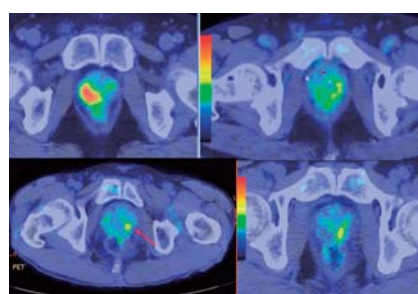
学会のトピックスとしては膀胱がんに対する免疫治療が注目されているようでしたが、ロボット支援手術の様々な疾患への応用、低侵襲の新たな治療デバイスなどの発表もありました。

個人的には、様々な国から演題発表があったため、同じ英語でも出身の違いで色んな訛りがあっておもしろいなあと、内容半分で聞いておりました。それと同時に、自分の英語力のなさを今更ながら痛感しました。帰国後、英会話の本を探しに本屋に行ったのは内緒です。

出張期間も長く、泌尿器科の伊勢田医師、尾澤医師にはご迷惑をおかけしましたが、非常に貴重な経験ができました。今回得た経験を少しでも日常診療に還元できるよう、精進していきたいと思っております。



発表の様子



PETCT 画像